

今回は弓道の競技としての特色について見てみましょう。

弓道は、他の武道とは大きく違い、相手と接近・接触しては闘いません。的という対象物としかも距離を持ちます。このことが、他の武道とは異なる闘い方を展開することになります。弓は、その昔から矢は二本で一組でした。甲矢・乙矢とっていますが、「はや」は早い矢、つまり先に射る矢、「おとや」は弟の「おと」から来ていると考えられます。

弓の戦い方の特徴は、遠くから突然矢が飛んでくるという衝撃を相手に与えます。時には、その矢が「神矢」、神によって射られた矢ではないかと度肝を抜くことになります。ですから、初矢は勝負の行方を決める意味付けがあります。ところが、初矢を射外してしまったらどうするのでしょうか。その場合は、その原因を探ってすぐさま修正して二の矢を射ることで。そして、三の矢、四の矢と繰り出します。これが矢継ぎ早です。いくさの場面では矢種が尽きるまでこうして戦います。このような戦い方は、相手に接近する戦い方とは明らかに異なります。接近戦では、失敗は即、負けです。

今行われている弓道の試合も、同じことをしています。射詰めではない限り、現在は一回に複数矢を射場に持参します。二本一組の昔からの伝統を続けています。初矢が外れれば残身を取った瞬間に原因を探り、二本目につなげます。残心が射の反省と言われる所以です。そうやって絶えず次へ次へと繋げます。ところが、えてして修正しきれずに次々と射外してしまい、気が付いてみれば皆残という時もありますが、・・・。

その逆の闘い方が、一射絶命です。一本の矢に命を懸ける訳です。射詰めはまさにサドンデス、後がありません。射外せば終わりですから、必死に闘うのです。

弓道の闘い方はこればかりではありません。連中を続けるプレッシャー、逆に連失でも射場に立ち続ける辛さ、団体戦での負けいくさの仕舞い方、特に落は大変です。また自分より段位が下など格下相手の射詰めなど、様々な場面で射手の個性が出てきて、そのギリギリの場でどのように人間力が発揮されるか、ということが弓道の競技の本当の面白さではないでしょうか。公衆の面前で卑怯・臆病は論外ですが、緊張の中で自分の弱気と必死に闘っているのが伝わってきた時などはある種の感動でしょう。何本中って順位が決まる、というのは記録には残りますが、あの時のあの場面、あの射手の闘い方はどうだったか、というのは人の記憶に残ります。弓道は、公の面前、緊張の場でこそ発揮されての実力です。自分の持っている力を出し切れればそれは幸いですが、失敗を糧に捲土重来を期すのも修行です。人間はそう簡単には悟れません。

試合会場では見ている人にはその場の大勢でも、射場の一人の射手にとっては大きなドラマとなる訳ですが、そもそも試合の「試」は当て字です。元々は「為合い」で、互いにする意から戦い合う意、そして武芸を競う意となりました。時代が下って「試」の字が当てられるようになったのには、それなりの意味付けがあったからでしょう。自分の闘う技術がどの程度通用するのか試しに手合わせする、それによって自分の弱点も把握でき、それを知らせてくれた相手だから礼が出来るのです。弓道の場合は、的が知らせてくれます。